

名古屋大学附属図書館研究開発室
年次報告
2004

Annual Report of Nagoya University
Library Studies 2004

目 次

附属図書館研究開発室規程	1
室 員 名 簿	2
事 業 報 告	3
研究開発概況	5

名古屋大学附属図書館研究開発室規程

制 定 平成16年4月1日

(設置)

第1条 名古屋大学附属図書館に研究開発室を置く。

(目的)

第2条 研究開発室は、大学における学術情報の収集、保存、提供等の教育研究支援活動のうち、附属図書館長が定める事項に関する研究開発及び図書館情報教育を行い、もってハイブリッド図書館としての機能の強化を図るとともに、高度な図書館サービスの実現に寄与することを目的とする。

(室長)

第3条 研究開発室に室長を置き、附属図書館長をもって充てる。

2 室長は、研究開発室の業務を掌理する。

(室員)

第4条 研究開発室に、専任室員若干名を置く。

2 専任室員は、本学大学教員のうちから、附属図書館長の推薦に基づき、総長が任命する。

3 第1項に定めるもののほか、研究開発室に兼任室員を置くことができる。

4 室員は、室長の指示に従い、研究開発室の業務に従事する。

(細則)

第5条 この規程に定めるもののほか、研究開発室に関し必要な事項は、附属図書館長が定める。

附則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

. 室 員 名 簿

室 長 **伊藤 義人**

(附属図書館長)

専門領域：構造工学・環境システム工学

所 属：工学研究科

(2001年4月 ~)

専任助教授 **逸村 裕**

専門領域：図書館情報学

所 属：附属図書館研究開発室

(2002年1月 ~)

兼任教授 **溝口 常俊**

専門領域：歴史地理学

所 属：環境学研究科

(2002年4月 ~)

専任助手 **秋山 晶則**

専門領域：日本史学

所 属：附属図書館研究開発室

(2001年8月 ~)

兼任教授 **吉川 正俊**

専門領域：データ工学

所 属：情報連携基盤センター

(2002年6月 ~)

兼任教授 **杉山 寛行**

専門領域：中国文学・中国思想史学

所 属：文学研究科

(2001年6月 ~)

兼任助教授 **松原 茂樹**

専門領域：知能情報学

所 属：情報連携基盤センター

(2002年4月 ~)

兼任教授 **塩村 耕**

専門領域：日本文学

所 属：文学研究科

(2003年4月 ~)

兼任助手 **津田 知子**

専門領域：計算機性能評価

所 属：情報連携基盤センター

(2002年4月 ~)

兼任教授 **長尾 伸一**

専門領域：社会思想・政治思想・政治経済学

所 属：経済学研究科

(2002年4月 ~)

兼任助教授 **平野 靖**

専門領域：画像処理工学

所 属：情報連携基盤センター

(2002年5月 ~)

兼任教授 **山内 一信**

専門領域：医療管理情報学

所 属：医学系研究科

(2002年4月 ~)

. 2004年度事業報告

室員及び研究開発内容

室長	伊藤 義人	全体統括
専任助教授	逸村 裕	1) ハイブリッドライブラリーの研究開発 2) 情報技術と図書館 3) 図書館情報流通のマネジメント 4) 図書館と情報専門職の将来像
専任助手	秋山 晶則	1) ハイブリッドライブラリーの企画立案及びコンテンツ作成に関わる研究開発 2) 附属図書館所蔵史資料及び関連史資料の整理・研究 3) 主題知識を活用した図書館情報リテラシー教育
兼任教授	杉山 寛行	1) 附属図書館所蔵漢籍の調査・目録作成とDB化、及び資料活用の高度化をめざすための研究開発 2) 伊藤圭介と尾張本草学・医学
兼任教授	塩村 耕	1) 附属図書館所蔵和書古典籍の調査・目録作成と 名大システム古典籍書誌DB構築の研究、及び文化資源活用のための研究 2) 西尾市岩瀬文庫所蔵古典籍の調査・DB化、及び文化資源活用に向けた地域連携の研究
兼任教授	長尾 伸一	1) 本学所蔵ホップズ・コレクションを中心とした近代思想史資料の利用方法の改善
兼任教授	山内 一信	1) 伊藤圭介日記の解読 2) 伊藤圭介日記(第10集)出版記念会の開催協力
兼任教授	溝口 常俊	1) 「地域環境史」構築のための研究 2) GISを用いた近世地誌分析 3) バングラデシュにおけるイスラム教徒とヒンズー教徒の交流に関する研究
兼任教授	吉川 正俊	1) XMLデータベース及びXML索引の開発 2) XML検索エンジンの開発 3) 時制、バージョン統合型XMLデータモデル 4) Semantic WebのためのRDFデータベースの開発 5) 「名古屋大学研究者プロフィール」の拡充
兼任助教授	松原 茂樹	1) Web文書の自動分類に関する研究 2) デジタル文書の自動要約に関する研究
兼任助教授	平野 靖	1) 全学的認証基盤の運用 2) 3次元画像処理とその医用画像への応用 3) 講義・会議記録の検索手法
兼任助手	津田 知子	

活動概況（開発室全体に関する事項）

4月	~21日 春季特別展「和歌（うた）の書物 - 新古今和歌集とその周辺」 17日 ギャラリートーク「新古今和歌集とその時代」 大井田晴彦「今回の展示書物について」 田中喜美春「新古今集とその時代」 島田 修三「新古今和歌集と前衛短歌」 19日 第1回FM（Faculty Meeting）
5月	17日 第2回FM 24日 第8回懇談会：寺田元一「公共圏としての図書館の可能性 - 図書館を知とメディアのフォーラムに」
6月	21日 第3回FM
7月	26日 第4回FM、第9回懇談会：平野 靖「UBCの情報ネットワークとアプリケーション」
9月	6日 第5回FM 13日 資料保存プロジェクト会議
10月	18日 第6回FM 29~11月12日 秋季特別展「川とともに生きてきた - 東高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術」 30日 特別展講演会 - 「宝暦治水」の虚像と実像 - 秋山晶則「東高木家文書にみる「宝暦治水」」 内倉昭文「鹿児島県における研究の現状と展望」 羽賀祥二「宝暦治水事業と 聖地 の誕生」
11月	6日 特別展古文書講座 15日 第7回FM 29日 第11回懇談会：溝口常俊「カースト社会の悲劇 - バラモン20歳女性の火葬」
12月	20日 第8回FM 22日 第12回オープンレクチャー：中野 修・神谷 修治 「紙資料の保存を考える」(総長裁量経費WS共催)
2005年	
1月	17日 第9回FM 25日 第13回オープンレクチャー：青木 睦「アーカイブズ保存のための物理的コントロールのあり方」(総長裁量経費WS共催)
2月	21日 第10回FM 23日 第14回オープンレクチャー：那須雅熙「国立国会図書館の資料保存とIFLA/PACアジア地域センターの活動」(総長裁量経費WS共催)
3月	14日 第11回FM

刊行物

・ LIBST Newsletter No.5	2004年 9月30日発行
・ 川とともに生きてきた 展示図録	2004年10月28日発行
・ 名古屋大学附属図書館研究年報 第3号	2005年 3月31日発行
・ 附属図書館研究開発室年次報告2004	2005年 3月31日発行

・研究開発概況

伊藤義人（室長・附属図書館長・工学研究科教授）

研究開発事項

全体統括

成果のリスト（図書館関係のみ）

〔著作〕

- (1) 伊藤義人（2004）：法人化後の附属図書館経営について - 競争と連携 - ，名古屋大学附属図書館報「館燈」No.151, pp.1-3.
- (2) 伊藤義人（2004）：学術情報の収集・発信の企画と運用，平成16年度大学図書館職員長期研修講義要綱，pp.66-71.
- (3) 伊藤義人（2004）：名古屋大学の情報戦略について，センターニュース，名古屋大学情報連携基盤センター，巻頭言，第10号, Vol.4, No.1, pp.1-2.
- (4) 伊藤義人（2004）：アジア諸国における情報サービスの利用 第4回：日本 電子ジャーナルコンソーシアム形成と今後の問題点について「国立大学図書館協会電子ジャーナルタスクフォースの活動」，情報管理, Vol.4 No.12, pp.786-795.
- (5) 伊藤義人（2004）：平野眞一総長に聞く：図書館は知の宝庫，学術の基盤，名古屋大学附属図書館報「館燈」，No.154, pp.1-4.
- (6) 伊藤義人（2004）：基調報告（1）電子ジャーナルの円滑な導入と安定的な運営の実現に向けての取り組み-国立大学図書館協会電子ジャーナル・タスクフォースの活動-，京都大学附属図書館報「静修」Vol.41, No.2/3合併号, pp.2-8.
- (7) 伊藤義人（2005）：なごや平和公園の自然，なごや平和公園自然観察会，2005.1.
- (8) 伊藤義人，他（2004）：電子図書館と電子ジャーナル， - 学術コミュニケーションはどう変わるか - ，情報学シリーズ8，丸善株式会社，pp.51-78.

〔講演〕

- (1) 学術情報の収集・発信の企画と運用，平成16年度大学図書館職員長期研修，独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター，2004.
- (2) 電子ジャーナルの円滑な導入と安定的な運営の実現に向けての取り組み - 電子ジャーナルタスクフォースの活動 - ，学術情報・電子ジャーナルシンポジウム，京都大学，2004，基調講演.
- (3) 図書館と情報・学びの森-，名古屋大学附属学校，2004.
- (4) 国立大学図書館協会における電子ジャーナル・コンソーシアム，国立大学図書館協会総会，大阪大学，2004.
- (5) 電子ジャーナル・タスクフォースの活動，電子ジャーナルコンソーシアム形成と今後の学術情報流通の課題，大阪府立大学，2004.

逸村 裕（専任室員・助教授）

研究開発事項

- (1) ハイブリッドライブラリーの研究開発
- (2) 情報技術と図書館
- (3) 学術情報流通のマネジメント
- (4) 図書館と情報専門職の将来像

研究開発概況

- (1) ハイブリッドライブラリーの研究開発
- (2) 情報技術と図書館
- (3) 学術情報流通のマネジメント
- (4) 図書館と情報専門職の将来像

2001年度より開始した「名古屋大学学術情報コラボレーションシステム」の拡充強化を図り、「学術ナレッジ・ファクトリー構想」を提案し、その開発を行っている。

このほか、大学及び社会の情報化の進展に伴う情報利用行動について調査を行った。この一部は学会報告を行い、また論文は投稿中である。

また、2003年度より科学研究費補助金基盤研究（A）情報専門職の養成に向けた図書館情報学教育体制の再構築に関する総合的研究」（代表 慶應義塾大学上田修一教授）に研究協力者として参加。これは三年計画であり、2004年度はインタビュー調査と質問紙調査を行った。この結果の一部として学会報告を行った。

さらに、2004年度より科学研究費補助金基盤研究（B）「電子情報環境下における大学図書館機能の再検討」（代表 千葉大学土屋俊教授）に研究分担者として参加し、情報発信、機関リポジトリ、大学図書館マネジメントの調査研究を行っている。これは三年計画であり、成果報告の一部は既に米国において発表を行っているが、本論は2005年後半より順次行う予定である。

成果リスト

〔論文記事〕

1. 学術ナレッジファクトリー構想. 館燈. no.153. 2004, p.1-2.
2. 利用教育の重要性について 問題提起. 私立大学図書館協会東海地区協議会「館灯」no. 43, 2004, p.1-5.

〔学会発表等〕

1. 短期大学生の情報探索行動の分析. 三田図書館・情報学会研究大会.2004.10.9. (共同発表)
2. 大学図書館における情報専門職に関する調査：LIPER大学調査班中間報告. 日本図書館情報学会研究大会. 2004.11.6. (共同発表)
3. Institutional repositories in Japanese national universities: historical and philosophical reflections. SPARC Meetings. Institutional Repositories: The Next Stage. November 18, 2004. Washington, D.C. (共同発表)

〔講演等〕

- 1 . オープンアクセスと学術情報. 第10回名古屋大学附属図書館研究開発室懇談会. 2004.9.6.
- 2 . (1) 海外大学図書館の事例. 国立情報学研究所・京都大学附属図書館主催2004年度大学図書館講習会. 2004.11.11.
(2) 海外大学図書館の事例. 国立情報学研究所・東京大学附属図書館主催2004年度大学図書館講習会. 2004.11.18.
- 3 . 歴史資料の保存 - デジタルアーカイブ化 - . 文部科学省・愛知県教育委員会主催. 平成16年度東海北陸地区図書館地区別研修. 2004.11.18.

秋山晶則（専任室員・助手）

研究開発事項

- (1) ハイブリッドライブラリーの企画立案支援及びコンテンツ作成に関わる研究開発
- (2) 附属図書館所蔵史資料及び関連史資料の整理・研究
- (3) 主題知識を活用した図書館情報リテラシー教育

研究開発概況

- (1) ハイブリッドライブラリーの企画立案支援及びコンテンツ作成に関わる研究開発

「名古屋大学学術情報コラボレーションシステム」を発展させた「学術ナレッジファクトリー（AKF）構想」の一翼を担うべく、新たに発見された北高木家文書をはじめ、東高木家文書等、地域の特色ある史料群と大学所蔵高木家文書をデジタル統合し、2004年秋季特別展の際、高木家文書デジタルライブラリーとして試験公開を行った。

さらに、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受け、伊藤圭介文庫や自然災害情報を組み込んだ統合DBの構築を進めており、エコ（環境共生）コレクションDBとして公開予定である（<http://libst.nul.nagoya-u.ac.jp/eco/index.html>）。

また、大学所蔵史料については、デジタルコンテンツ化の前提となる保存状態を調査し、修復計画をたてるとともに、固着した記録類を優先した形での文書修復を開始した。

- (2) 附属図書館所蔵史資料及び関連史資料の整理・研究

本年度は、地域貢献特別支援事業「木曾三川流域の歴史情報資源の研究と活用」プロジェクトとして、附属図書館所蔵（西）高木家文書と密接に関わる高木家関連史料の整理・研究を重点的に行った。

うち、北高木家文書（個人蔵）については、約4,500点の悉皆調査を実施し、目録刊行にむけたデータ整備を行った。また、昨年度から調査を開始した東高木家文書については、調査と並行してフィルム撮影・スキャンニングを行い、高精細画像も含めた試験公開を行っている。

このほか、岐阜市の方から上石津町に寄贈された西高木家文書（附属図書館所蔵分と一体であった文書、点数不明）や大垣市の方が入手された高木家文書（100点）などの調査を実施した。

このプロジェクトの成果については、附属図書館2004年秋季特別展「川とともに生きてきた - 東高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術」で広く公開するとともに、あわせて講演会「宝暦治水の虚像と実像」及び古文書講座を企画・実施した。

関連して、2004年度より、科学研究費補助金（C）「近世中後期における自然災害と地域社会」（研究代表者）の交付を受け、災害と地域文化の関連について研究を開始したほか、河川環境管理財団から河川整備基金の助成を受け、「木曾三川流域における水害と地域社会の対応」についても研究を進めている。

このような史料研究や成果公開とあわせ考えなければならないのが、史料の保存と管理の問題である。今年度は、総長裁量経費による「大学所蔵学術資料・標本類の緊急保存対策プロジェクト」に加わり、人為的・物理的・生物的な被害を引き起こさないための、多様な防除手段を複合した保存管理システム構築にむけた基礎的調査・研究を行った。

次年度には、こうした諸成果をふまえ、関係自治体や史料所蔵者と連携し、史料保存問題に配慮しながら、さらなる歴史情報資源の掘り起こしとデジタルアーカイブズによる公開を進め、新しい歴史像の構築を図っていくことが課題となる。

(3) 主題知識を活用した図書館情報リテラシー教育

研究開発室が課題とする主題知識を持った図書館員（Subject Librarian）養成にむけた図書館情報リテラシー教育支援の一環として、図書雑誌から電子情報源をも含むコレクション構築のための継続調査を行ったほか、愛知淑徳大学図書館実習生に対し、古文書資料に関する講義を実施するなどの活動を行った。さらに、デジタルライブラリーの構築とあわせ、歴史情報資源へのアクセスを支援するパスファインダーの作成・活用手法についても研究を進めている。

成果のリスト

〔論文等〕

1. 加速器質量分析法による「源頼朝袖判御教書」の¹⁴C年代測定（共著）. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書XVI. p198-205.

〔講演等〕

1. 東高木家文書からみた「宝暦治水」. 名古屋大学附属図書館2004年秋季特別展講演会. 2004年10月30日.
2. 特別展史料解説. 同上（古文書講座）. 2004年11月6日.
3. 災害と地域社会の対応. 自然再生のための地域環境史創成プロジェクト研究会. 2004年12月16日.
4. 史料のデジタル化をめぐって. 愛知県博物館協会研修会. 2005年3月3日.

〔その他〕

1. 2004年秋季特別展にむけて. Libst Newsletter.no.5, 2004. p7.
2. 「川とともに生きてきた」を終えて. 館燈. no.154, 2004. p6-7.
3. 川とともに生きてきた（展示会図録）. 2004. 37p.

杉山寛行（兼任室員・文学研究科教授）

研究開発事項

- (1) 附属図書館所蔵漢籍の調査・目録作成とDB化、及び資料活用の高度化をめざすための研究開発
- (2) 伊藤圭介と尾張本草学・医学

研究開発状況

- (1) 附属図書館所蔵漢籍の調査・目録作成とDB化、及び資料活用の高度化をめざすための研究開発

前年度にひきつづき、和漢古典籍整理委員会（委員長杉山寛行）の課題の一環として、名古屋大学所蔵の漢籍の調査をおこないDB化の基礎作業を進行しつつある。本年度は青木正児文庫を古典籍DBとして公開した。以下名古屋大学所蔵の漢籍を和書との共同作業として、公開のための作業が課題として残されている。

現在京都新聞では青木正児に関する連載記事を掲載しているが、所蔵文庫の紹介の一方途として、調査協力をおこなった。

- (2) 伊藤圭介と尾張本草学・医学

現在は尾張藩だけではなく、江戸中後期の医学思想、とりわけ中国医学の日本における受容とその変容過程を検証する作業をおこなっている。江戸期の後世派、古方派、蘭方派などの対立、混淆を検証することによって、尾張における医学・本草学の意味を探ろうとしている。

成果リスト

〔講演〕

「名古屋大学博物館所蔵「栄衛中経図」について - 江戸時代の血管図とその思想」, 名古屋大学博物館第36回特別講演会, 2004年11月12日

塩村 耕（兼任室員・文学研究科教授）

研究開発事項

- (1) 附属図書館所蔵和書古典籍の調査・目録作成と 名大システム 古典籍書誌DB構築の研究、及び文化資源活用のための研究
- (2) 西尾市岩瀬文庫所蔵古典籍の調査・DB化、及び文化資源活用の地域連携の研究

研究開発概況

- (1) 附属図書館所蔵和書古典籍の調査・目録作成と 名大システム 古典籍書誌DB構築の研究、及び文化資源活用のための研究
 - ・前年度に引き続き、附属図書館所蔵神宮皇学館文庫の古典籍の調査及びDB化作業をすすめた。
 - ・名大システム 古典籍書誌DB試行版作成の企画立案を支援した。
 - ・図書館職員による古典籍取り扱い能力の向上のための勉強会「古書の会」に参加、助言協力した。
 - ・名古屋大学総長裁量経費による「大学所蔵学術資料・標本類の緊急保存対策プロジェクト」の企画立案及びワークショップにおける討論に参加した。
- (2) 西尾市岩瀬文庫所蔵古典籍の調査・DB化、及び文化資源活用の地域連携の研究
 - ・前年度に引き続き、岩瀬文庫所蔵古典籍の悉皆調査及びDB化作業をすすめた。
 - ・講演会及び岩瀬文庫に於ける展示を通して、岩瀬文庫の価値や悉皆調査の意義について社会に情報を発信した。
 - ・「名古屋手紙の会」を主宰、その月例勉強会を通して市民とともに古文書読解能力の向上に努めた。

成果のリスト

〔論文〕

1. 「西鶴と伊勢の御師」『東海近世』14号．2004年12月．p85-91.

〔講演等〕

1. 「西鶴の素顔とその人間観」．日本福祉大学名古屋キャンパス主催「第17回人間講座」．2004年5月22日
2. 「高校時代をどう過ごすか」．名古屋市立菊里高校「総合的な学習の時間・探求」．2004年6月18日 酒井朗（工学研究科）・戸田山和久（情報科学研究科）・渡邊誠一郎（環境学研究科）とともにパネル・ディスカッション。
3. 「西鶴は天才である 附、古い文献を読むということ」．愛知県国語教育研究会高等学校部会「名瀬地区国語教育研究会総会」．2004年6月23日
4. 「岩瀬文庫について」．東海北陸地区図書館地区別研修（文部科学省・愛知県教育委員会主催）．2004年11月17日
5. 「今年度の資料調査からわかったこと」．岩瀬文庫特別講座．2005年3月5日

〔その他〕

- 1 . 展示図録『こんな本があった！ 岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告展 』. 2005年1月
- 2 . 「古書三昧 岩瀬文庫悉皆調査奮戦記」『あおぎり』2号（名古屋大学文学部・文学研究科同窓会NewsLetter）. 2005年1月 . p8-9.
- 3 . 「岩瀬文庫」『今、開かれる文庫の魅力』（名古屋大学大学院文学研究科シンポジウム報告書）. 2005年2月 講演録と討論記録

長尾伸一（兼任室員・経済学研究科教授）

研究開発事項

- (1) ホップズ・コレクションを中心とした西欧近代思想にかかわる資料（本学図書館所蔵）利用の改善のための研究

研究開発概況

本年度は附属図書館が所蔵する近代思想史関係の貴重図書をデータベース化することをめざし、以下の3点について具体的な作業に入った。

- 1 西欧近代思想に関する古典資料の総合的目録の作成
- 2 資料の利用方法の検討
- 3 附属図書館以外の部局所蔵資料の調査、目録の統合

その第一段階として、中央図書館および各部局図書館（経済学研究科、法学研究科、教育発達科学研究科）における西洋近代思想資料の所蔵状況と利用方法を点検した。その結果、いくつかの重要な改善点が判明したため、とりあえずそれらの検討を行った。

1．西欧近代思想に関する古典資料の総合的目録の作成についての問題点

- (1) 貴重図書資料の全体の総合カタログが存在しない。
- (2) 個々のカタログは冊子とCD-ROMの二つの形態があり、名大内で作成したものと、外部から購入したもの（STCやESTCなど）の二つのタイプがある。
- (3) LANDMARKのマイクロフィルムは、たいへん豊富な量を所蔵しているにもかかわらず、部分的な業者の目録リストしかなく検索ができないので、カタログをつくる必要がある。

2．資料の利用方法における問題点

- (1) 図書館職員向けの貴重図書ならびにマイクロフィルム利用マニュアルがない。
- (2) マイクロフィルムの所蔵状況を確認するファイルが分散している。
- (3) カタログが物理的に分散している。
- (4) 貴重書室等での閲覧は可能だが、専用の閲覧席が少ない。
- (5) マイクロフィルムの利用では閲覧の申請手続きが煩雑。
- (6) 職員用のマイクロフィルムの対照表ファイルとOPACの請求記号が連動していない。またSTCおよびESTCのCD-ROMカタログに載っている記号とも連動していない。
- (7) ホップズ・コレクションのマイクロフィルムの一部に判読不可能な箇所が存在する。

3．中央図書館以外の部局所蔵資料の問題点

〔経済学研究科〕

- ・貴重図書専用室があるが、空調の整った部屋に所蔵されているのはおもに雑誌類で、図書類が所蔵されている部屋の空調は図書室全体の空調と連動しており、その部屋のみで独立した運転や調整ができない。
- ・貴重図書専用のカード目録はあるが、冊子体目録がなく、最近のものはメンテナンスされていない。マイクロフィルムはOPACにのっておらず、検索はできない。

〔法学研究科〕

- ・貴重図書室は除湿機が設備されており、夏シーズンの日中のみ運転されている。
- ・貴重図書専用の図書カードはなく、他の図書と一緒にされており、検索しづらい。
- ・マイクロフィルム資料の1987年以前受入のものはOPACで検索できないが、専用のカード目

録はあり、またマイクロ資料受入台帳（冊子体）が維持されている。

〔教育発達科学研究科〕

- ・関連する貴重図書は、主に19世紀フランスの教育史関係のもの十数冊のみで、貴重図書は図書事務室の書架の一部分に置かれている。OPACに入っているものと入っていないものがある。

〔文学研究科〕

- ・貴重図書は各教官の研究室に分散して保管されており、保管の詳細はいまのところ不明。

以上の問題点に対する当面の改善案としては、以下の諸点が考えられる。

古典資料の総合カタログの作成

図書カードから文書形式で目録をおこし貴重図書総合カタログを作成したうえで、これをもとにデータベースをつくり、電子的な統一カタログ（図書およびマイクロフィルム）を作成する。その際、総合カタログとOPACの請求記号とを整合させる。また今後購入する貴重図書はデータベース化後、逐次入力する。ホップズ・コレクションのマイクロフィルムのリールは、業者へ再チェックを依頼する。マイクロフィルムが判読不可能であれば、利用者には貴重図書本体を公開しなければならない。また今後の課題として、貴重図書総合カタログとSTC、ESTC、LANDMARKとの兼ね合いを検討する、部局図書室の貴重図書の所蔵情報と連動させるか、分けるかを検討する、和漢の古典資料目録とどのように整合させるかを検討することなどが必要となる。

貴重図書およびマイクロフィルムの利用手続きの合理化

貴重図書およびマイクロフィルムの利用手続きと検索方法について、職員向けのマニュアルを作成する。マイクロフィルム利用の受付・閲覧セクションをつくり、担当の職員をおいて、利用者が一回の申請でマイクロフィルムをみるができるようにする。またマイクロフィルムのリーダーの使用法およびフィルムの種類に応じた機械操作についてマニュアルを作成し、利用者が参照できるようマイクロリーダー近辺に設置する。潜在ユーザー（学生、院生）を推計し、利用手続きを改善したうえで、年度ごとに利用方法についての講習会を開く。院生の貴重図書の閲覧を許可制にする（研究テーマごとに最大1年を許可期間とする）。ホップズ・コレクション、STCおよびESTCを所蔵していることをホームページで公開し、所蔵をアピールする。ホップズ・コレクション、STCおよびESTCは、マイクロ化されたもの以外OPACで検索できないので、利用方法についてPDFでホームページに掲載する。

追記

なお、ホップズ・コレクションのマイクロフィルム確認については業者に依頼中であり、利用マニュアル、機械操作マニュアル、ホームページ上での案内、利用手続の簡便化等については、目下、各担当掛で検討が進められている。

山内一信（兼任室員・医学系研究科教授）

研究開発事項

- (1) 圭介日記の解説
- (2) 伊藤圭介日記（第10集）出版記念会の開催協力

研究開発概況

- (1) については明治8年の『伊藤圭介日記』の解説と他の資料を参考にし、当時の圭介に関する重要事項を考察した。
- (2) については平成16年11月7日（日）午後1時から4時まで東山植物園植物会館研修室で著者の司会のもとで開催した。

(1) について

『錦囊翁日記』明治8年5月から同年12月までの翻刻事業に参加した。この日記が書かれた頃の圭介は以下の状況であった。圭介は明治4年7月29日に文部省出仕を仰せ付けられ、本郷真砂町に居を構えた。その後、出仕を免ぜられたり、仰せ付けられたりする不安定な状況があった。明治6年『日本産物誌』の編纂に従事し、同年山城部2冊、武蔵部2冊、近江部2冊を完成させ、文部省から刊行させた。明治7年には『日本植物図説』草部イ初編を三男謙の編次で出版した。そして明治8年をむかえた。

この8年の日記¹⁾で重要なことは3点ある²⁾。1) は6月1日に文部省より小石川植物園に時々出仕すべきとの命を受けた。このことは辻新次がその知らせをもって圭介宅に来たことで分かる。また小石川薬園から植物園に変わったとも記されている。以後月に4、5日植物園に足を運び、明治10年10月には『小石川植物園草木目録』前編を印行することになった。またこの間、『日本産物誌』の編纂に力をいれた。

2) この日記には『日本産物誌』に専業するとか校専するというような言葉がみられ、産物誌編纂への情熱を伺うことができる。その後『日本産物誌』は明治11年に美濃部が、明治12年には信濃部が発刊され、圭介の努力が実った。

3) シーボルト記念塔建設事業に熱意をもってあたっている。7月6日に「田中より明日シーボルト記念塔集会延引」とあり、これに関する集会が何度かあったようである。その後8月9日、11月17日、12月16日にもこれに関する記載がある。シーボルト氏記念塔建設に至った背景・経緯を幸田正孝氏の論文³⁾よりまとめると以下の如くである。

1873年（明治6）オーストリア帝国のヨーゼフ 世の即位25周年を記念して首都ウィーンで万国博覧会が開かれた。ウィーンでは博覧会にそなえてドナウ川の改造工事を行ない、プラーター公園を会場として産業宮を中心に国別の展示場を配置した（入場者730万人）。その際、博覧会の一翼をになったウィーン園芸協会は、1866年にミュンヘンで死去したシーボルトを顕彰するために、生誕地であるドイツのピュルツブルグ（Würzburg）に記念塔を建設することを決議し、翌1874年（明治7）10月から寄付金の募集を始めた。この万博には明治政府が最初に参加したのもので、1871年（明治4）12月に、参議大隈重信・外務大輔寺島宗則・大蔵大輔井上馨を「澳国博覧会御用掛」とし、翌72年正月には文部大丞町田久成・編集権助田中芳男も加わった。2月、正院に「澳国博覧会事務局」を設置し、少議官細川習・工部少輔山尾庸三・大蔵省出仕渋沢栄一・工部大丞佐野常民らも加わった。出品物の調査は文部省博物局が行なった。

1873年（明治8）3月，文部省の博物館・書籍館・博物局・小石川薬園は博覧会事務局に吸収合併された^{3,4}。日本でもシーボルト記念塔建設の募金の依頼を受け、圭介らの募金活動が始まった（写真）。なおこの募金額は、圭介は30円を、大河内は50両を、田中芳男は50円を寄付したようである。

このように圭介日記は明治初めころの明治政府が博物学を整備し、国際的対応を進める状況について、リアルにとらえている。

(2) については平成16年11月7日（日）午後1時から4時まで伊藤圭介日記（第10集）出版記念会が東山植物園植物会館研修室で著者の司会のもとに開催された。発表者とタイトルは以下のごとくであった。これらの発表により、圭介の出自、師弟関係、世界を見る姿勢が明らかとなった。杉村啓治：伊藤圭介と可児久々利の医師団、 膝館寿巳恵：国会図書館所蔵『小野職懋宛伊藤圭介書簡』、 幸田正孝：『シーボルト記念塔ヲ勸進スル記』について、 坂崎信之：坂崎親成資料について、 島岡 真：伊藤圭介と奈良坂源一郎。

〔文献〕

1. 『錦翼図譜の世界』 幕末明治の博物誌、名古屋大学附属図書館・研究開発室（編集・発行）平成15年
2. 伊藤圭介日記第十集、錦翼翁日記（明治8年5月 12月）圭介文書研究会（編集）名古屋市東山植物園（発行）平成16年
3. 幸田正孝：『シーボルト氏記念塔を勸進スルの記』出版記念会レジュメ、平成16年。
4. 横山進、幸田正孝：『シーボルト氏記念塔を勸進スル記』伊藤圭介日記第十集、錦翼翁日記（明治8年5月 12月）圭介文書研究会（編集）名古屋市東山植物園（発行）P187-200、平成16年



写真 田中芳男より伊藤圭介宛のシーボルト氏記念塔相談についての手紙
（東山植物園伊藤圭介記念室蔵）

溝口常俊（兼任室員・環境学研究科教授）

研究開発事項

- (1) 「地域環境史」構築のための研究
- (2) GISを用いた近世地誌分析
- (3) バングラデシュにおけるイスラム教徒とヒンドゥー教徒の交流に関する研究

研究開発概況

- (1) 「地域環境史」構築のための研究としては、2004年度名古屋大学総長裁量経費の助成により、7回の研究会と1回の国際シンポジウムを開催し、数多くの知見を得た。その趣旨は、自然と人間に関わる身近な問題を取りあげ、それを平易に語ることから出発し、両者の関係を重視した新たな地域環境史論を創造するための構想を語ってみたい、というものである。日本には山があり、平野があり、川があり、海がある。そこで人々はいかなる生活をしてきたか、その実態を、歴史資料の発掘、フィールドワーク、ライフヒストリーをもとに明らかにする。さらに、自然と人間の対立と調和という視点で、開発史、災害史を学び、その知恵を21世紀社会へと活かしていきたい。この構想と成果については、2005年4月9日に研究開発室が主催する講演会で報告する予定である。
- (2) 「GISを用いた近世地誌分析」に関しては、「GISによる近世隠岐の村落景観」と題して次のような研究をおこなった。この目的は隠岐における空間的差異を貞享5年（1688）に記された隠岐の地誌『増補隠州記』を用いて明らかにすることである。この地誌は村単位に、1) 領主、2) 年寄、3) 村高、4) 田畑、5) 新田、6) 家、漁、塩、農産物、油などにかかる租税、7) 独立農民としての本百姓、従属農民としての「間脇」、8) 牛馬、9) 男女数、10) 寺社、11) 近隣村への距離、が記されている。さらに、島嶼や山地に関する景観が述べられている。これらの情報を歴史地図化するために初心者用のGIS関連ソフト「マンダラ」を用いた。その結果、隠岐各村がそろって、農業、漁業、林業のすべてを行おうという強い意欲をもっていたということが明らかになり、さらに、スケールダウンして家レベルにおいてもこの三位一体の生業を営もうとしていた。言い換えれば、各村各世帯は農業と他業を共に行うという複合生業を行っていたのである。さらに、尾張の地誌分析の成果を、2004年3月にベルリンで開催されたヨーロッパ社会科学歴史学会で発表し、その内容を、P.Princeの唱えたreal world, imagined world, abstract worldの三つの世界論に組み替えて小論を書き、若尾・羽賀編の『記憶と記録の比較文化史』（名古屋大学出版会2005.1）に上梓した。また、その内容をG.W.スキナーの中心・周辺論を検証する形で再検討し、名古屋大学文学部紀要英語版（2005.3）に載せた。
- (3) 「バングラデシュにおけるイスラム教徒とヒンドゥー教徒の交流に関する研究」は、2004年度福武学術文化振興財団の研究助成によるもので、8、9月の現地調査を経て、異教徒、異カーストの日常生活レベルでの交流の一端を明らかにした。定期市や行商人を通じての買い物行動はムスリム、ヒンドゥーともに差別することなく行われていたし、ヒンドゥーの結婚・葬儀にムスリムがでることもあった。ヒンドゥーは火葬と決めつけていたが、実際は土葬をするものもみられた。また結婚に関して、数少ないとはいえムスリムの家に嫁にいったヒンドゥーやヒンドゥー内でも異なったカースト間で通婚も行われていた。

成果リスト

〔論文〕

1. 「カーストの壁」『地理』49-6, 2004, p21-26 .
2. 「木曾三川の治水」『地図情報』Vol.24 no.1, 2004, p22-26 .
3. 「近世日本の地誌と地域像 - 尾張藩撰地誌の世界」, 若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史』名古屋大学出版会, 2005, p89-112 .
4. 「歴史家の郷土語り - 地域論と県民性」, 若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史』名古屋大学出版会, 2005, p358-387 .
5. "Spatial Differentiation in the Nobi Core: Villages and Towns in Owari, Central Japan, 1672-1822", Journal of the School of Letters (JSL), Volume 1 (2005), Nagoya University, 127-148.

〔学界展望〕

1. 「村落」, 『人文地理』56-3, 2004, p262-264 .

〔書評〕

1. 大塚柳太郎編『ソロモン諸島 - 最後の熱帯林 - 』東京大学出版会、2004、『人口学研究』34号, 2004, p46-47 .

〔学会発表・講演〕

1. 「近世津山における町人の家族構成」歴史地理学会、於、松江、2004.7.3
2. 「近世屋久島の複合家族と「婿問い婚」」比較家族史学会、於、京都大学、2004.10.23
3. 「カースト社会の悲劇 - バラモン女性20歳の火葬 - 」名古屋大学附属図書館研究開発室懇談会、於中央図書館5F多目的室、2004.11.29
4. 「近世隠岐における地誌分析」GIS国際シンポジウム、於、国際日本文化研究センター、2005.2.7
5. 「自然再生と地域環境史」自然再生国際シンポジウム、於、名古屋大学、2005.2.28
6. 「江戸期なごやアトラスと尾張名所図会の世界」名古屋観光コンベンションビューロー第2回観光施設部会講演会、於、トヨタテクノミュージアム産業技術記念館、2005.3.4
7. 「バングラデシュにおける壺作りカーストの生業と通婚」日本地理学会、於、青山学院大学、2005.3.28

〔海外での国際学会〕

1. Tsunetoshi Mizoguchi, "Precious Topographies in Premodern Japan", Europe Social Science History Association at Berlin, Germany, 2004.3.27
2. Tsunetoshi Mizoguchi, "Marriage and Labour Migration in Kai Province during the Tokugawa Era," Social Science History Association at Chicago, USA, 2004.11.19

〔その他〕

1. 愛知県, 愛知県史編纂事業に従事
2. 名古屋市, 名古屋市史編纂事業に従事
3. 藤岡町, 藤岡町誌編纂事業に従事

吉川正俊（兼任室員・情報連携基盤センター教授）

研究開発事項

- (1) XMLデータベースおよびXML索引の開発
- (2) XML検索エンジンの開発
- (3) 時制，バージョン統合型XMLデータモデル
- (4) Semantic WebのためのRDFデータベースの開発
- (5) 「名古屋大学研究者プロフィール」の拡充

研究開発概況

- (1) 多くのXMLデータには文書スキーマ情報が付随しているため，それを利用し高速に検索，更新を可能とするXML木の経路ラベル付け手法としてSPIDER (Schema-based Path IDentifiER) と呼ぶ手法を開発した．SPIDERを用いたXML問合せ処理手法としてVirtualJoinと呼ぶ方法を開発し，Stack-TreeやPathStackなどの構造結合 (structural join) のための技法との比較実験を行なった．その結果，SPIDERを用いたVirtualJoin手法は，問合せ処理のI/Oコストが大幅に削減でき，構造結合技法に優ることを確認した．特に多くの結合を必要とする場合やデータ容量が大きくなる場合に両者の差は顕著となる．また，SPIDERとDewey順を組み合わせたSPIDER-Deweyを適用することによって，関係型XMLデータベースXRelを拡張し，従来のXRelに比べ，検索，更新性能の大幅な向上を実現した．さらに，SPIDER-Deweyを利用し，XMLの構造検索と内容検索の両方を可能とするB+木を開発し，GiST (Generalized Search Trees for Database Systems) 上に実装するとともに，Kaushikらの転値リストを用いた手法との比較を行い，検索性能が問合せによっては100倍以上向上することを確認した．
- (2) XML検索エンジンのためのテストコレクションの構築のために，Initiative for the Evaluation of XML Retrieval (INEX) 国際プロジェクトに参加し，テストコレクション構築に協力した．また，XMLサーチエンジンを構築する際に，各種統計量を用いて検索対象XML部分文書を選定することが，検索の高速化のみならず，高精度化にも寄与することをINEX documentcollectionを用いた実験によって確認した．具体的には，INEX documentcollectionから抽出できる全てのXML部分文書に対して，その単語数，索引語数，センテンス数など，XML部分文書の内容に関連する統計量を集計し，安定している統計値を持つXML部分文書を検索対象と設定することで，検索対象となるXML部分文書数を大幅に削減することが可能であることが判明した．また，INEXテストコレクションを格納するためにXRelを拡張した．
- (3) 時制XML文書データベースとバージョンの管理の融合をサポートするためのデータモデルであるTVDM (Temporal Version Data Model) を提案した．TVDMは，連続するバージョン間の変更をtemporal XML expression (tXex) を利用したtDeltaによって表現する．tXexは，XML要素に通常の変数と時制変数を導入し拡張したものである．TVDMでは，valid timeに加え，各バージョンのversion timeを導入した．すべてのバージョンは，tDeltasによって統一的に表現できる．TVDMを実装する技法についても研究を行い，XMLデータと時刻情報の連携が容易な索引構造を開発を行った．またメタデータの相互利用性を向上させるための言語の要件を明らかにすると共に，そのような言語を提案した．

(4) Semantic Webにおいて、メタデータ記述の基盤をなしているのはRDF (Resource Description Framework) である。RDFSuite, Jena2, Redlandなど、これまでに提案されているRDFデータベースは、単純に文を格納していることが多く、RDFスキーマの情報を利用した検索ができなかったり、経路式に基づく検索処理の効率が悪いなどの問題点がある。そこで、本研究では、RDFデータを関係データベースに格納する効率的な手法を開発した。インスタンスデータとスキーマデータを区別して扱うために、RDFグラフを五つの部分グラフに分割したことにより、各部分グラフに対して、異なる手法を採用して関係表に格納する。本手法により、スキーマ情報を持たないRDFデータでも扱うことができ、経路式に基づく問合せを効率的に処理することができる。Jena2とredlandなど既存のデータベースでは、経路の長さが増すにつれて処理時間が増加するのに対し、提案手法では処理時間が低下することが確認できた。

(5) 総長裁量経費を得て、名古屋大学の構成員による論文、特許を中心とする研究成果データを網羅的に管理し、今後、外部評価など多様な用途に利用可能であり、部局が独自に管理するデータとの整合性をとることも可能なデータベースシステムを設計し、データ項目拡充および機能追加を行った。既存システムに比べ、業績データの詳細化、対外活動登録項目の拡充、研究者の部局間移動や昇任などの履歴管理、公開ページURL固定化、特殊文字のHTML化など、データ項目および機能両面で拡充を行ったシステムを実現した。また、今回の改善を機に、本データベースシステムを情報連携基盤センター内のサーバおよびその上の関係データベース管理システム上で稼働させることとし、今後のポータルシステム等との連携が容易に行える環境を整備した。

成果リスト

〔国内論文誌〕

- (1) 江田 毅晴, 櫻井 保志, 天笠 俊之, 吉川 正俊, 植村 俊亮: “XML 木のための動的範囲ラベル付け手法”, 情報処理学会論文誌: データベース, Vol.45, No.SIG7 (TOD22), pp.102-114, 2004年6月.
- (2) 木村 文則, 前田 亮, 宮崎 純, 吉川 正俊, 植村 俊亮: “Web ディレクトリを言語資源として利用した言語横断情報検索”, 情報処理学会論文誌: データベース, Vol.45, No.SIG7 (TOD22), pp.208-217, 2004年6月.
- (3) 絹谷 弘子, 波多野 賢治, 吉川 正俊, 植村 俊亮: “キーワードを利用した XML 文書検索”, 情報処理学会論文誌: データベース, Vol.45, No.SIG7 (TOD22), pp.255-273, 2004年6月.
- (4) 的野 晃整, 天笠 俊之, 吉川 正俊, 植村 俊亮: “経路式に基づくRDFデータの関係データベースへの格納と検索”, 日本データベース学会 Letters, Vol.3, No.1, pp.21-24, 2004年6月.
- (5) Kazunari Sugiyama, Kenji Hatano, Masatoshi Yoshikawa, Shunsuke Uemura: “Adaptive Web Search Considering User's Ephemeral and Persistent Preferences” 日本データベース学会 Letters, Vol.3, No.1, pp.49-52, 2004年6月.
- (6) 鈴木 優, 波多野 賢治, 吉川 正俊, 植村 俊亮, 川越 恭二: “検索結果を統合するための関数選択手法”, 日本データベース学会 Letters, Vol.3, No.2, pp.69-72, 2004年9月.
- (7) 杉山 一成, 波多野 賢治, 吉川 正俊, 植村 俊亮: “ユーザからの負担なく構築したプロフィールに基づく適応的Web情報検索”, 電子情報通信学会論文誌, Vol. J87-D-I, No. 11, pp. 975-990, 2004年11月.

- (8) 的野 晃整, 天笠 俊之, 吉川 正俊, 植村 俊亮: “経路式に基づく RDF データの関係データベースへの格納と検索”, 電子情報通信学会論文誌, Vol. J88-D-I, No. 3, pp. 590-603, 2005年3月.

〔国際会議〕

- (1) Kazunari Sugiyama, Kenji Hatano, Masatoshi Yoshikawa and Shunsuke Uemura: “User-Oriented Adaptive Web Information Retrieval based on Implicit Observations” (short paper), The 6th Asia Pacific WebConference (APWeb'04), LNCS, Vol. 3007, pp. 636-643, Hangzhou, China, April 2004.
- (2) Kazunari Sugiyama, Kenji Hatano and Masatoshi Yoshikawa: “Adaptive Web Search Based on User Profile Constructed without Any Effort from Users”, The 13th International World Wide Web Conference (WWW2004), pp. 675-684, New York, NY, USA, May 17-22, 2004.
- (3) Dao Dinh Kha and Masatoshi Yoshikawa: “XML Query Processing using SPIDER”, Proceedings of the First Korea Japan Database Workshop, pp. 108-114, Seoul, Korea, August 3-4, 2004.
- (4) Dao Dinh Kha and Masatoshi Yoshikawa: “XML Query Processing using a Schema-based Numbering Scheme”, Second International XML Database Symposium (XSym 2004), pp. 21-34, Toronto, Canada, August 29-30 2004.
- (5) Vilas Wuwongse and Masatoshi Yoshikawa: “Towards A Language for Metadata Schemas for Interoperability”, International Conference on Dublin Core and Metadata Applications 2004 (DC 2004), Shanghai, China, October 11-14, 2004.
- (6) Fuminori Kimura, Akira Maeda, Jun Miyazaki, Masatoshi Yoshikawa, Shunsuke Uemura: “Cross-Language Information Retrieval using Web Directories as a Linguistic Resource”, Asia Information Retrieval Symposium (AIRS2004), Beijing, China, October 18-20, 2004. (poster)
- (7) Kenji Hatano, Hiroko Kinutani, Toshiyuki Amagasa, Yasuhiro Mori, Masatoshi Yoshikawa, and Shunsuke Uemura: “Analyzing the Properties of XML Fragments Decomposed from the INEX Document Collection”, INEX 2004 Workshop Pre-Proceedings (informal proceedings), pp. 50-57, Schloss Dagstuhl, Germany, December 6-8, 2004.
- (8) Vilas Wuwongse, Masatoshi Yoshikawa, and Toshiyuki Amagasa, “Temporal Versioning of XML Documents”, The 7th International Conference of Asian Digital Libraries (ICADL 2004), Lecture Notes in Computer Science, Vol. 3334, pp. 419-428, Shanghai, P. R. China, December 13-17, 2004.
- (9) Kei Fujimoto, Toshiyuki Shimizu, Dao Dinh Kha, Masatoshi Yoshikawa and Toshiyuki Amagasa: “Efficient Storage of XML Documents in Relational Databases”, The 7th International Conference of Asian Digital Libraries (ICADL 2004), Shanghai, P. R. China, December 13-17, 2004. (poster)
- (10) Akiyoshi Matono, Toshiyuki Amagasa, Masatoshi Yoshikawa, and Shunsuke Uemura, “A Path-based Relational RDF Database”, Proc. Of The Sixteenth Australasian Database Conference (ADC 2005), pp. 95-103, Newcastle, Australia, January 31-February 3, 2005.

〔講演等〕

- (1) 吉川正俊: 「XMLデータベース」(招待講演), 日本ソフトウェア科学会第7回プログラミングおよびプログラミング言語ワークショップ (PPL2005) 論文集, pp. 216-217, 2005年3月11日.

松原茂樹（兼任室員・情報連携基盤センター助教授）

研究開発事項

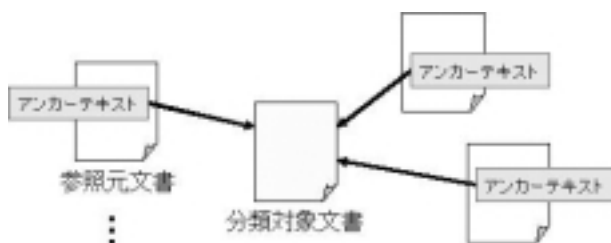
- (1) Web文書の自動分類に関する研究 (Web Document Categorization)
- (2) デジタル文書の自動要約に関する研究 (Digital Document Summarization)

研究開発概況

(1) Web文書の自動分類に関する研究

ディレクトリ型検索エンジンは、あらかじめWeb文書をトピックごとに分類しておくことにより、ユーザの目的にあった文書へのアクセスを容易にする。従来、Web文書のディレクトリへの分類は人手によるものがほとんどであったが、Web文書の急速な増加に伴い、分類の自動化が求められている。文書分類においては、特徴素の抽出方法が分類精度に大きく影響する。これまでに提案された抽出方法の多くは、分類の対象となる文書内に出現する単語に重みを与えることにより、文書の特徴付けている。しかし、Web文書は文書内容やそのサイズも様々であるため、対象とするWeb文書のテキスト量が少ないときには、分類に有効な特徴素を得ることは難しい。また、Web文書は画像や映像といったテキストをもたないコンテンツも含んでおり、これらを自動で分類するための手法が求められる。

本研究では、Web文書の自動分類における分類精度の向上のため、ハイパーリンクによる参照情報を用いた文書分類手法を開発した。Web文書では、アンカーテキストはリンク先の文書内容を端的に表現していることが多く、そこから得られる特徴素はリンク先の文書分類に有効に機能すると考えられる。本手法では、分類する文書そのものから特徴素を抽出する以外に、分類の対象となる文書の特徴素を、リンクで直接参照している文書群のアンカーテキストとその周辺のテキストからも抽出する。すなわち、分類対象のWeb文書とそのリンク元のWeb文書群から作成する2つの特徴ベクトルによって文書を表現する。本手法の有効性を評価するために、名古屋大学Webディレクトリを用いて分類実験を行った。実験の結果、HTML文書の分類においては、本手法の正解率は59.5%であり、従来手法と同程度であったものの、画像文書の分類において43.5%の正解率を示しており、Web文書分類における本手法の有効性を確認した。



図．Web文書のリンク構造



図．名古屋大学Webディレクトリ

(2) デジタル文書の自動要約に関する研究

現代の司法制度において判例は重要な役割を果たしている。裁判では、専門家は過去の類似判例を参照し、その判例に対して裁判官、検察官、弁護士がそれぞれの立場における判断、解釈を付け加える。特に裁判官に対しては、「判例を尊重しこれに従うべきである」とされており、判例から与えられる影響は特に大きい。判例は判決文から読み取られるべきものであり、直ちに該当する判例を見つけることは容易ではない。ユーザは、大量の判決文の中から該当文書を選び出し、その文書から判例を読み取る必要がある。判決文の要約を生成することにより、ユーザの負担を軽減することが可能となる。判決文の要約に関して諸外国ではSUMやLetSumなどのプロジェクトが進行している。しかし、日本では、判決文の要約に関する研究はほとんど行われていないのが現状である。

本研究では、日本語判決文の自動要約手法を開発した。判決文の要約は一般的に定義されておらず、また、適切な要約とはそもそも、ユーザやその目的に応じて異なる。本研究では、専門家が判決文から判例を読み取る際に利用する事実関係、論旨、判例の3要素から構成されることとして判決文の要約を生成する。本研究では、自動要約生成に判決文特有の知識を利用する。要約の生成は、主題への分割、要約に関係ない部分のフィルタリング、重要文のスコア付け、要約要求に応じた結果の生成、の4ステップで実行している。その過程で、判決文における経験則を適用して要約結果の向上を図っている。判決文の「理由」は複数の段落から構成され、各段落はそれぞれ1つの内容について記述される。まず、理由を要素ごとに定められた手がかり表現を用いて分類し、要素ごとに設定した手がかり表現を用いて重要文を抽出する。最高裁判所の判決文を用いて実験を行い、日本語判決文の自動要約生成における手がかり表現の利用可能性を検証した。

理由

上告代理人原田昭雄、影響浩典、原田昭雄の上告受理申立て理由第2点について
1 本件は、上告人が「フローズンスモークツナ・フィレ」(冷凍スモークマグロ切り身)100g(以下「本件食品」という。)を輸入しようとしたところ、被上告人から食品衛生法(平成15年法律第8号)による改正前のもの、以下「法」という。)6条に違反する旨の通知(以下「本件通知」という。)を受けたため、その取消しを求める事案である。
2 原審の確定した事実関係の概要は、次のとおりである。
(1) 上告人は、平成13年5月14日、本件食品を販売の用に供するため、被上告人に対し、法16条及び食品衛生法施行規則(平成13年厚生労働省令第207号)による改正前のもの、以下「旧法」という。)の規定に基づき輸入届出書を提出した。
(2) 被上告人は、同月16日、上告人に2kg、本件食品について、一般化疫菌の含有状態の検査を受けるよう指摘した。上告人は、財団法人千葉県薬剤師会検査センターに検査を依頼した上、同月18日、被上告人に対し、本件食品につき1kg当たり2370ppm(マイクログラム)の一般化疫菌を検出したとの同検査センターの輸入食品等試験成績証明書を提出した。
(3) 被上告人は、同月24日、上告人に対し、上記検査結果によれば本件食品は法6条の規定に違反するから精製し又は廃棄されたいとの記載のある食品衛生法違反通知書をもって本件通知を行った。
(4) 「輸入食品等監視指導要領基準」(平成8年1月29日(旧)省令第20号厚生省生活衛生局長通知)によれば、法16条所定の食品、添加物、器具又は容器包装(以下「食品等」という。)の輸入届出(以下「輸入届出」という。)に際し、検査所長が法に違反すると判断した食品等については、食品衛生法違反通知書により原則として精製し、若しくは廃棄又は食用外への転用を要するよう当該食品等を輸入しようとする者を指導することとされている。そして、通関業務においては、検査所長が食品等を輸入しようとする者に対し、食品衛生法違反通知書を交付した場合(以下、同通知書による通知を「食品衛生法違反通知」という。)には、同入りに対し、食品等輸入届出済証(食品等輸入届出書の副本に「輸入食品等届出済証」の印を押印したものを、検査所長による検査に合格したものあっては、更に「合格」の印を押印したもの。)を交付せず、同所長に対し食品衛生法違反物件通知書を交付して、当該食品等について輸入許可をなさないよう求め、これを受けて税関では、関税基本通達(昭和47年3月1日付け第100号)に基づき上記の食品等輸入届出済証等の交付がない輸入申告書は受理しない取扱いが行われている。

【事実関係】

上告人は、平成13年5月14日、本件食品を販売の用に供するため、被上告人に対し、法16条及び食品衛生法施行規則16条(平成13年厚生労働省令第207号)による改正前のもの、以下「旧法」という。)の規定に基づき輸入届出書を提出した。被上告人は、同月24日、上告人に対し、上記検査結果によれば本件食品は法6条の規定に違反するから精製し又は廃棄されたいとの記載のある食品衛生法違反通知書をもって本件通知を行った。

【論旨】

本件は、上告人が「フローズンスモークツナ・フィレ」(冷凍スモークマグロ切り身)100g(以下「本件食品」という。)を輸入しようとしたところ、被上告人から食品衛生法(平成15年法律第8号)による改正前のもの、以下「法」という。)6条に違反する旨の通知(以下「本件通知」という。)を受けたため、その取消しを求める事案である。

【判例】

法16条は、厚生労働大臣が、輸入届出をした者に対し、その認定判断の結果を告知し、これに同意すべきことを定めていると解するのが相当である。このような食品等輸入届出済証の交付は厚生労働大臣の委任を受けて検査所長が行う当該食品等が法に違反しない旨の応答であり、食品衛生法違反通知書の交付はこれに違反する旨の応答であって、これらは、前記(1)の法16条が定める輸入届出をした者に対する応答が具体化されたものであると解される。したがって、本件通知は、上記のような法的効力を有するものである。取消訴訟の対象となると解するのが相当である。

図・日本語判決文の「理由」

図・判決文の自動要約の結果

成果リスト

【論文等】

- (1) Tomohiro Ohno, Shigeki Matsubara, Nobuo Kawaguchi, and Yasuyoshi Inagaki: Robust Dependencyoshi Fujimura, Katsunobu Itou, Nobuo Kawaguchi, Shigeki Matsubara and Fumitada Itakura: Construction and Evaluation of a Large in-car Speech Corpus, IEICE Transactions on

- Information and Systems, Vol. E88-D, No. 3, pp. 553-561 (2005).
- (2) Nobuo Kawaguchi, Shigeki Matsubara, Kazuya Takeda and Fumitada Itakura: CIAIR in-car Speech Corpus -Influence of Driving Status- IEICE Transactions on Information and Systems, Vol. E88-D, No. 3, pp. 578-582 (2005).
 - (3) Hiroya Murao, Nobuo Kawaguchi, Shigeki Matsubara, Yasuyoshi Inagaki: Example-based Query Generation for Spontaneous Speech, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol. E87-D, No. 2, pp. 324-329 (2005).
 - (4) Yoshihide Kato, Shigeki Matsubara, Katsuhiko Toyama, and Yasuyoshi Inagaki: Incremental Dependency Parsing Based on Headed Context Free Grammar, Systems and Computers in Japan, Vol.36, No. 2, pp.84-97 (2005).
 - (5) Yuki Irie, Shigeki Matsubara, Nobuo Kawaguchi, Yukiko Yamaguchi and Yasuyoshi Inagaki: Design and Evaluation of Layered Intention Tag In-Car Speech Corpus, Proceedings of Oriental-COCOSDA-2004 (2004).
 - (6) Hitomi Tohyama, Shigeki Matsubara, Koichiro Ryu, Nobuo Kawaguchi and Yasuyoshi Inagaki: CIAIR Simultaneous Interpretation Corpus, Proceedings of Oriental-COCOSDA-2004 (2004).
 - (7) Tomohiro Ohno, Shigeki Matsubara, Nobuo Kawaguchi, and Yasuyoshi Inagaki : Robust Dependency Parsing of Spontaneous Japanese Speech and Its Evaluation, Proceedings of 8th International Conference on Spoken Language Processing (2004).
 - (8) Yuki Irie, Shigeki Matsubara, Nobuo Kawaguchi, Yukiko Yamaguchi and Yasuyoshi Inagaki : Speech Intention Understanding based on Decision Tree Learning, Proceedings of 8th International Conference on Spoken Language Processing (2004).
 - (9) Nobuo Kawaguchi, Shigeki Matsubara, Yukiko Yamaguchi, Kazuya Takeda and Fumitada Itakura: CIAIR In-Car Speech Database, Proceedings of 8th International Conference on Spoken Language Processing (2004).
 - (10) Hiroya Murao, Nobuo Kawaguchi, Shigeki Matsubara, and Yukiko Yamaguchi, Yasuyoshi Inagaki: Example-based Spoken Dialogue System with Online Example Augmentation, Proceedings of 8th International Conference on Spoken Language Processing (2004).
 - (11) Keita Hayashi, Yukiko Yamaguchi, Shigeki Matsubara, Nobuo Kawaguchi: Speech Understanding, Dialogue Management and Response Generation in Corpus-Based Spoken Dialogue System, Proceedings of 8th International Conference on Spoken Language Processing (2004).
 - (12) Yoshihide Kato, Shigeki Matsubara and Yasuyoshi Inagaki: Stochastically Evaluating the Validity of Partial Parse Trees in Incremental Parsing, Proceedings of ACL-2004 Workshop on Incremental Parsing: Bringing Engineering and Cognition Together, pp. 18-25 (2004).

平野 靖（兼任室員・情報連携基盤センター助教授）

研究開発事項

- (1) 全学認証基盤の運用
- (2) 3次元画像処理とその医用画像への応用
- (3) 講義・会議記録の検索手法

研究開発概況

- (1) 全学的認証基盤の運用

LDAPサーバを用いた全学IDの運用を行った。全学IDを名古屋大学での一元的な認証システムと位置づけ、各部局で提供される情報サービスでの認証として利用できるように整備した。今年度は国際交流課が提供する「外国人研究者等受入れデータベース」、情報連携基盤センターが提供する「名古屋大学キャンパスワイドモバイルネットワーク実証実験」、および学務部が提供する「学生の成績投入システム」・「履修申請システム」におけるユーザ認証へ利用を拡大させた。現在、全学IDを利用してサービスを提供している学内情報サービスプロバイダの一覧は下記のURLを参照いただきたい。

<http://www2.itc.nagoya-u.ac.jp/center/id.htm>

さらに、全国共同利用計算機を持つ7大学（北海道，東北，東京，名古屋，京都，大阪，九州）と国立情報学研究所で構成する認証研究会にメンバーとして参加し、大学内の認証システムのあり方、およびそれらを相互結合し、各大学が保有する情報リソース（大規模計算資源や学内LANなど）を安全・安心に相互利用する方法を検討した。

今後の課題として、複数のLDAPサーバを用いた負荷分散や高可用性の実現、PKI（Public Key Infrastructure）の導入によるより安全な電子認証基盤の実現などが挙げられる。

- (2) 3次元画像処理と医用画像への応用

3次元画像処理アルゴリズムの開発を行った。今年度は3次元2値画像に対する最適曲面当てはめ手法を3次元濃淡画像にも適用できるように改良し、3次元濃淡画像中の2つの領域間の境界面を任意の滑らかさの3変数多項式で当てはめるとともに、境界面に対する多項式の一致の度合い（＝境界面が存在する可能性）を定量的に評価する手法を開発した。これにより、画像中の境界面の曲率による分類や境界面が存在する可能性に応じた境界面の抽出が可能となる。さらに本手法を胸部X線CT像（図1）に適用し、肺の外側の境界面を抽出できることを確認した（図2）。

また、医師が胸部CT像を用いた肺結節の良悪性鑑別（病変部ががんであるか否かを判断すること）のための画像所見を定量的に評価し、計算機による診断支援を試みた。具体的には、医師が画像のみから、良性であると判断できる結節に対する自動分類を行ったところ、80%程度の分類精度を得た。

- (3) 講義・会議記録の検索手法

映像や音声による講義や会議の議事録を作成する手法の検討を行った。とくに、講師や発言者の位置の自動特定や、会議参加者の視線方向推定による注目対象物の特定などを行い、講義や会議の自動アーカイビングの基礎的検討を行った。さらに、映像・映像による議事録から重

要と思われる部分の推定を行い、検索キーに用いる手法の検討も行った。

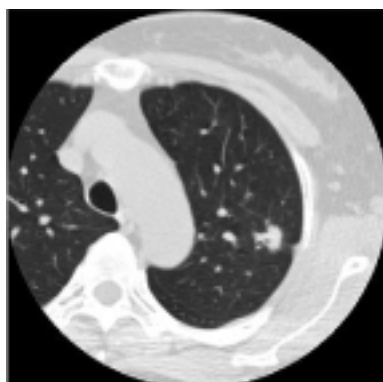


図1 胸部X線CT像

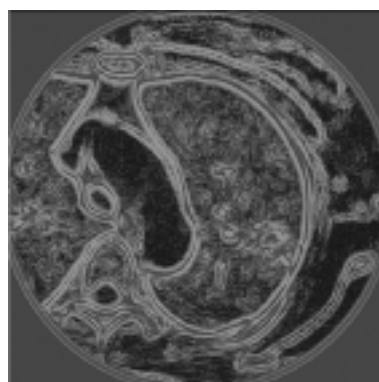


図2 実験結果

〔著書〕

- (1) 鳥脇純一郎, 平野 靖, 長谷川 純一: 3次元集中度-3次元空間中の線集中パターンの定量化-, 形の科学会編「形の科学百科事典」, pp.747-750, 朝倉書店, 東京, 2004.08.25

〔国際会議〕

- (1) Y.Hirano, J.Hasegawa and J.Toriwaki: Recognition of boundary voxels of tumors in chest CT images for extraction of tumor regions, Proceedings of Computer Assisted Radiology and Surgery (CARS) 2004, p.1359
- (2) I.Kishida, T.Sugihara, Y.Hirano and K.Mase: A Study on Presentation Methods for Interactive Poster, The 11th International Display Workshops (IDW2004), pp. 1507-1510

〔シンポジウム〕

- (1) K.Mori, Y.Suenaga, Y.Mekada, Y.Hirano, T.Kitasaka, J.Hasegawa, J.Toriwaki and H. Natori: Development of Navigation-based CAD System as Intelligent CAD System, Proceedings of The First International Symposium on Intelligent Assistance in Diagnosis of Multi-Dimensional Medical Images, pp.I-56-I-59
- (2) 末永 康仁, 目加田 慶人, 森 健策, 平野 靖, 北坂 孝幸, 長谷川 純一, 鳥脇 純一郎, 名取 博: 知的CADとしてのナビゲーション診断システムの開発, Proceedings of The Second Symposium on Multi-Organ, Multi-Disease CAD, pp.II-93-II-98
- (3) 北坂 孝幸, 森 健策, 出口 大輔, 平野 靖, 末永 康仁, 目加田 慶人, 長谷川 純一, 鳥脇 純一郎: 胸部領域におけるナビゲーション診断型CADシステムの開発, Proceedings of The Second Symposium on Multi-Organ, Multi-Disease CAD, pp.II-99-II-102

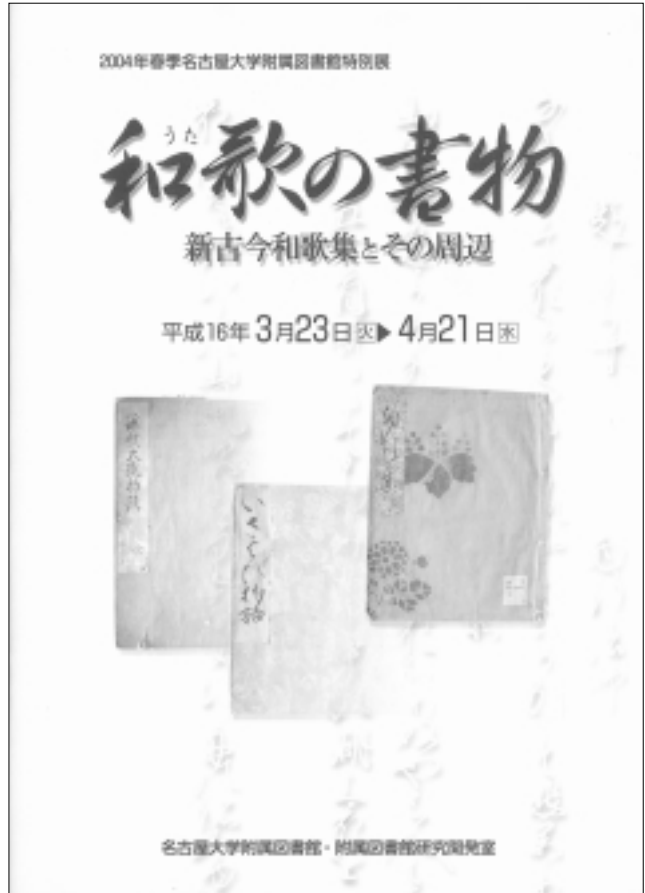
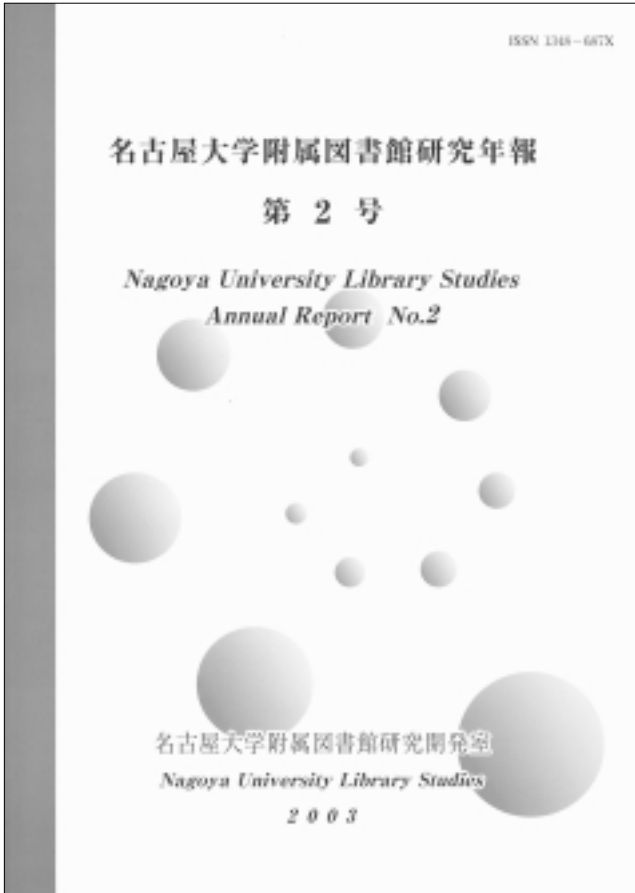
〔研究会・大会〕

- (1) 山城 貴久, 平野 靖, 梶田 将司, 間瀬 健二: 体験記録映像を用いたユーザ行動モデル作成の検討, 第3回情報科学技術フォーラム (FIT2004), pp.525-526 (K-057)
- (2) 志村 将吾, 平野 靖, 梶田 将司, 間瀬 健二: 体験映像の日記インタフェース, 第3回情報科学技術フォーラム (FIT2004), pp.527-528 (K-058)

- (3) 大江 展弘, 平野 靖, 梶田 将司, 間瀬 健二: 全方位画像を用いた会議記録・閲覧システム, 第3回情報科学技術フォーラム (FIT2004), pp.557-558 (K-072)
- (4) 神山 祐一, 平野 靖, 梶田 将司, 間瀬 健二, 勝山 貴美子, 山内 一信: 話題構造の可視化による医師-患者コミュニケーション支援手法, 第3回情報科学技術フォーラム (FIT2004), pp.599-600 (K-091)
- (5) 豊住 健一, 北坂 孝幸, 森 健策, 末永 康仁, 平野 靖, 間瀬 健二, 高橋 友一: オンライン手書き数式認識のための視覚の誘導場に基づく文字切り出し手法の予備的検討, 平成16年度電気関係学会東海支部連合大会講演論文集, pp. O-487
- (6) 森田 洋介, 平野 靖, 北坂 孝幸, 森 健策, 末永 康仁, 鳥脇 純一郎, 関 順彦, 江口 研二: 3次元胸部X線CT像における良性小結節自動認識のための角検出手法の提案, 平成16年度日本エム・イー学会東海支部学術集会, p.15
- (7) 神山 祐一, 平野 靖, 梶田 将司, 間瀬 健二, 勝山 貴美子, 山内 一信: 話題構造の可視化による医師-患者コミュニケーション支援手法, 平成16年度日本エム・イー学会東海支部学術集会, p.30
- (8) 平野 靖, Sidney Fels: 最適曲面当てはめによる濃淡画像からの境界面抽出, 第14回コンピュータ支援画像診断学会大会・第13回日本コンピュータ外科学会大会合同論文集, pp.331-332
- (9) 森田 洋介, 平野 靖, 北坂 孝幸, 森 健策, 末永 康仁, 鳥脇 純一郎, 関 順彦, 江口 研二: 胸部CT像における良性小結節認識のための結節形状および血管接続位置に基づく特徴量開発, 電子情報通信学会技術報告, MI2004-100, pp.109-114
- (10) 志村 将吾, 平野 靖, 梶田 将司, 間瀬 健二: 体験映像への感情付与インタフェース, インタラクシオン2005論文集, pp. 59-60
- (11) 大江 展弘, 平野 靖, 梶田 将司, 間瀬 健二: 全方位画像からのインタラクシオン認識を用いた会議記録の編集・閲覧システム, 情報処理学会第67回全国大会, pp. 4_149-4_150
- (12) 加藤 雄一, 大江 展弘, 陳 金姫, 平野 靖, 梶田 将司, 間瀬 健二: 音声情報を用いた会議における雰囲気把握支援方法の検討", 情報処理学会第67回全国大会, pp. 4_151-4_152
- (13) 西面 将樹, 平野 靖, 梶田 将司, 間瀬 健二: サイクリング体験記録における外界に対する関心事の抽出, 情報処理学会第67回全国大会, pp. 4_267-4_268
- (14) 森田 友幸, 平野 靖, 角 康之, 梶田 将司, 間瀬 健二: インタラクシオン解釈のための発見的パターン抽出法, 電子情報通信学会2005年総合大会講演論文集, p. 241 (2005).
- (15) Mehrdad Panahpour Tehrani, Yasushi Hirano, Toshiaki Fujii, Kazuya Takeda and Kenji Mase: 3D Sound Wave Field Representation Based on Ray-Space Method, 電子情報通信学会2005年総合大会講演論文集, p. 300.
- (16) 陳 金姫, 平野 靖, 梶田 将司, 間瀬 健二: 講義の強調的キャプチャと自動構造化に関する研究, 電子情報通信学会2005年総合大会講演論文集, p. 163.
- (17) 笠野 孝志, 平野 靖, 梶田 将司, 間瀬 健二: 演習支援システムにおける手書きアノテーションのための基礎検討, 電子情報通信学会2005年総合大会講演論文集, p. 165

[センター広報誌など]

- (1) 平野 靖: 入門LDAP認証(1) - 準備 -, 名古屋大学情報連携基盤センターニュース(第10号), 4, 1, pp.33-46



朝日新聞 2004年3月24日 朝刊



名古屋大学附属図書館 2004年秋季特別展

川とともに生きてきたⅢ

— 東高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術 —



2004年10月29日～11月12日
名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

NEWS

附属図書館が2004年秋季特別展を開催

— 川とともに生きてきた Ⅲ —

附属図書館は、10月29日(金)から11月12日(金)まで、附属研究開発室と共催で、名古屋大学附属図書館2004年秋季特別展「川とともに生きてきたⅢ—東高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術—」を開催しました。

附属図書館では、江戸時代を通じて木曾三川流域の水を管理していた交代寄合旗本高木家(西高木家)に伝来した重点資料群を数える「高木家文書」を掲載し、研究開発室で解説して調査・研究を進めているところです。この調査・研究成果の公表と併せ、今年は本館3階の分館に挑んだ江戸中期の大規模治水工事である「宝暦治水」の竣工250周年にもあたることから、改めて「宝暦治水」事業全体を振り返り、自然と人間の関係について考える機会にできればと、今回の特別展を企画しました。

なお、附属図書館では、これまでに、特展「川とともに生きてきた」シリーズとして、基調の高木家文書を対象とするパートⅠ(平成12年3月)、新たに発見された高木家文書の北高木家文書(個人蔵)を対象とするパートⅡ(平成13年3月)を開催してきましたが、パートⅢとなる今回は、文部科学省の流域の維持

防災競争事業「木曾三川流域の歴史地理情報系の研究と活用」プロジェクトで新たに調査を開始した高木家文書(高木家蔵の一つで、文書は個人蔵)を特集し、宝暦治水と流域治水の関係に焦点を当てて展示を行いました。

土曜・日曜・祝日を含めた3日間の開催期間中、本学の教職員や学生、一般市民を含め、300名を超える来場者があり、巨大な流域図や模型展示や古文書を熱心に拝読したり、調読が済んだ「高木家文書デジタルライブラリー」の調読結果を興味深げに閲覧したりする姿が目立ちました。

また、10月30日(土)には、「宝暦治水」の歴史と環境」を題した特別講演会が開催され、徳島県高松市立総合資料館学芸員、高松第二文学部研究員教授による講演が行われました。当日は、一般市民を主体に200名以上の参加があり、用意したアンケート会場にも入るに足りないほどの盛況となりました。

さらに、10月8日(土)に開催された特別展古文書講座では、秋が明子による展示資料の解説が行われ、79名を超える参加者が熱心に聞いていました。



▲展示の様子



▲特別講演会の様子

毎日新聞

木曾三川「宝暦治水」着工から250年

古文書に見る「水との戦い」

名大中央図書館で 初公開の図面も展示

きょうから特別展



名古屋大学附属図書館で、江戸時代を通じて木曾三川流域の水を管理していた交代寄合旗本高木家(西高木家)に伝来した重点資料群を数える「高木家文書」を掲載し、研究開発室で解説して調査・研究を進めているところです。この調査・研究成果の公表と併せ、今年は本館3階の分館に挑んだ江戸中期の大規模治水工事である「宝暦治水」の竣工250周年にもあたることから、改めて「宝暦治水」事業全体を振り返り、自然と人間の関係について考える機会にできればと、今回の特別展を企画しました。

なお、附属図書館では、これまでに、特展「川とともに生きてきた」シリーズとして、基調の高木家文書を対象とするパートⅠ(平成12年3月)、新たに発見された高木家文書の北高木家文書(個人蔵)を対象とするパートⅡ(平成13年3月)を開催してきましたが、パートⅢとなる今回は、文部科学省の流域の維持

中日新聞

江戸中期の「宝暦治水」工事

三川余流探 往時を再現

初公開の図面も展示

きょうから特別展



名古屋大学附属図書館で、江戸時代を通じて木曾三川流域の水を管理していた交代寄合旗本高木家(西高木家)に伝来した重点資料群を数える「高木家文書」を掲載し、研究開発室で解説して調査・研究を進めているところです。この調査・研究成果の公表と併せ、今年は本館3階の分館に挑んだ江戸中期の大規模治水工事である「宝暦治水」の竣工250周年にもあたることから、改めて「宝暦治水」事業全体を振り返り、自然と人間の関係について考える機会にできればと、今回の特別展を企画しました。

なお、附属図書館では、これまでに、特展「川とともに生きてきた」シリーズとして、基調の高木家文書を対象とするパートⅠ(平成12年3月)、新たに発見された高木家文書の北高木家文書(個人蔵)を対象とするパートⅡ(平成13年3月)を開催してきましたが、パートⅢとなる今回は、文部科学省の流域の維持

English

名古屋大学附属図書館
研究開発室
Nagoya University Library Studies

お知らせ 更新日: 2004年00月00日

▶ 2004年10月29日～11月12日
2004年秋季特別公開

▶ 2005年8月25日・26日 プログラム
名古屋大学電子図書館国際会議

名古屋大学附属図書館研究開発室
(附属中央図書館 3階)
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
Tel 052/789-3697,5689
Fax 052/789-3693
E-mail libst@ndl.nagoya-u.ac.jp
URL <http://www.ndl.nagoya-u.ac.jp>

研究開発室について

▶ 設置の目的 ▶ 組織(室員名簿) ▶ 地図・連絡先

教育・研究活動

▶ 研究開発 ▶ 教育 ▶ 活動報告
▶ 学内限定情報 ▶ 各種報告書

サイト内検索

GO

▶ サイトマップ / ▶ リンク集

All Rights Reserved, Copyright©2004, Nagoya University Library Studies

附属図書館研究開発室ホームページ



第12回オープンレクチャー(2004年12月22日)



第13回オープンレクチャー(2005年1月25日)



第14回オープンレクチャー(2005年2月23日)

名古屋大学附属図書館研究開発室年次報告

第3号(2004年版)

2005年3月31日発行

編集・発行 名古屋大学附属図書館研究開発室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
電話 052-789-5699
URL <http://www.nul.nagoya-u.ac.jp>
E-mail libst@nul.nagoya-u.ac.jp